

# 子豚の腹冷え対策 Q&A

(有)豊浦獣医科クリニック

中村 高志

## <離乳子豚について>

Q：離乳直後の子豚の保温はどうすればいいでしょうか？

A：

離乳直後は子豚にとって一番大事な時期で、十分な保温が必要です。部屋全体が 30℃前後の暖かさになっていれば良いのですが、温度が確保できない場合は最低でも保温箱を設置し、子豚の寝床の暖かさを確保することです。

具体的には、子豚の寝るスペースにマットなどを置き、下からの風を防ぎます。熱源のある保温マットがあれば最高です。さらに上や横からの風よけ板を取り付け、保温ヒーターを吊り下げます。そして温度だけに左右されず、必ず子豚たちの寝姿を確認してください。重なり合って寝ているようでは、温度が足りていない証拠です。

離乳直後の子豚には、さまざまなストレスがかかります。母豚（子豚たちにとって湯たんぽ代わりに大きな熱源）から離れなければならず、今までお世話になっていた母豚のおっぱい（子豚の栄養源）も飲ませてもらえなくなってしまう。農場によっては離乳したら直ちに離乳豚舎に移動させる場合もあり、環境が大きく変化するため子豚たちには二重・三重の苦勞が強いられます。十分な保温、新鮮な水と人工乳を食べやすいようにしましょう。



このような寝方が理想的です

Q：床マットを敷くことで、豚舎内の風の動き（空調）に影響がないか心配です

A：

通常使用される保温マットからの熱量では、特に換気への影響はないと思っていいでしょう。

陽圧式のウインドレス豚舎やピット換気での換気輪動が気になる場合は、循環ファンまたはダクトファンを使い、舎内の空気ムラをなくすようにします。

床マットは局所的な暖かさの確保となり、お腹を冷やさないためには最適だと思います。また、熱効率と子豚たちの寝る場所の温源として素晴らしい方法です。

最近の住宅事情で床暖房に人気があるのもそのためです。床マットと合わせて、子豚たちに冷気が当たらないように遮へいする構造、すなわち保温箱もしくは天板などを設置するとさらに良いでしょう。



**床マットと、上部に薄いベニヤ板で設置し、寝床を確保します**

Q：換気と保温のどちらを優先すべきなのでしょうか？

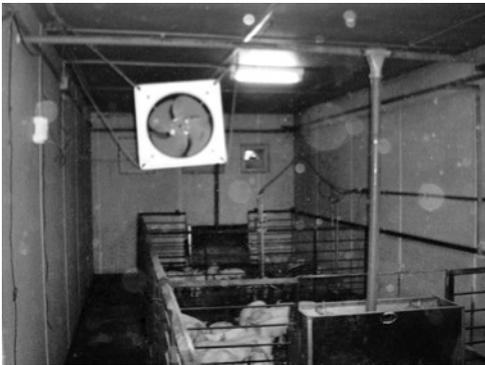
A：

どちらも重要で、換気と保温のバランスが大切です。

換気とは「舎内で発生する余分な熱量と水分の排出」です。冬場の最低換気時の問題は、舎内に空気ムラができてしまうことです。

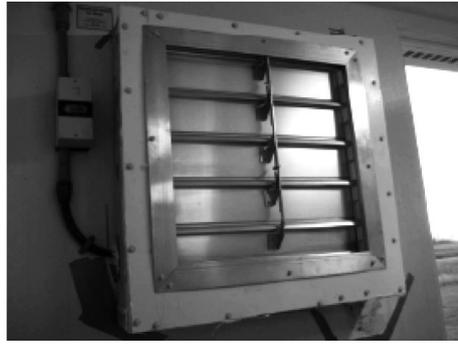
また、最低換気時の換気扇の回転数の制御にも注意が必要です。あまり換気扇の回転数が低い状態だと、強風時に外の風が逆に入ってしまうこと（バックドラフト）があります。空気は、冷たい空気が重く、暖かい空気が軽いという特徴があります。空気ムラがある場合、豚が生活する空間（床面）が寒く、天井のある上部が暑くなってしまいます。このような場合には舎内の空気を攪拌するようなファンを取り付け、舎内の空気が均一になるようにしてください。

また、このようなときに豚舎にすき間があると外の冷たい空気が急激に床に落ち、子豚に影響を与えるため、対策が必要です。



**最低換気時、循環ファンで舎内の温度ムラを減らせます**





上は、換気扇の外側に靴下のような生地を取り付け外側からの風の侵入を防いでいる  
下は、換気扇の前後にシャッターを付けて外側からの風の侵入を防いでいる  
(写真提供 大竹 聡先生)

Q：すき間風の良い対策はありますか？

A：

ちょっとした穴であればガムテープや飼料袋などを使い、すき間風の入るところをふさぎます。カーテンなどが切れていたりカーテンのすそから風が入る場合は、戸袋をつくったり、ブルーシートなどで豚舎全体を覆うように、外側からふさいでしまうのも良いと思います。



カーテンの外側からブルーシートを掛けてすき間風を防ぐ



すき間風が入らないよう豚房柵にビニールをたらす。ベニヤ板でもOK

Q：すき間風があるのか、またどこから吹き込むのか、見つけ方はありますか？

A：

まず、大きな見方としては豚の寝方で判断します。豚がどの場所で寝ているのか、また寝方がどうなっているかが基本です。

すき間風の流れを見る場合、視覚に訴える方法が良いと思います。スモークテスターという換気輪道を見る機械があります。これは住宅建設で利用するものですが、豚舎でも応用できます。また簡便に見るには線香などの煙の動きでも見つけられます。

ウインドウレスですき間風があるようではいけません。換気のコントロールがうまくいかなくなってしまうです。



## 換気扇のコントローラーを使いこなしましょう

Q：季節の変わり目など、昼と夜の温度の差が激しいときは、どのように管理すればいいでしょうか？

A：

季節の変わり目の環境管理は、大変気を使う重要な仕事です。

まず、保温器具などの温源は最低気温に合わせます。日中暖かくなった場合は、子豚の状態を見ながら換気（カーテンや窓の開閉）をします。自動カーテンや空調コントロールで制御できれば、より管理しやすくなります。

Q：豚舎内の環境管理で、温度計や湿度計をうまく活用するにはどうすればいいでしょうか？

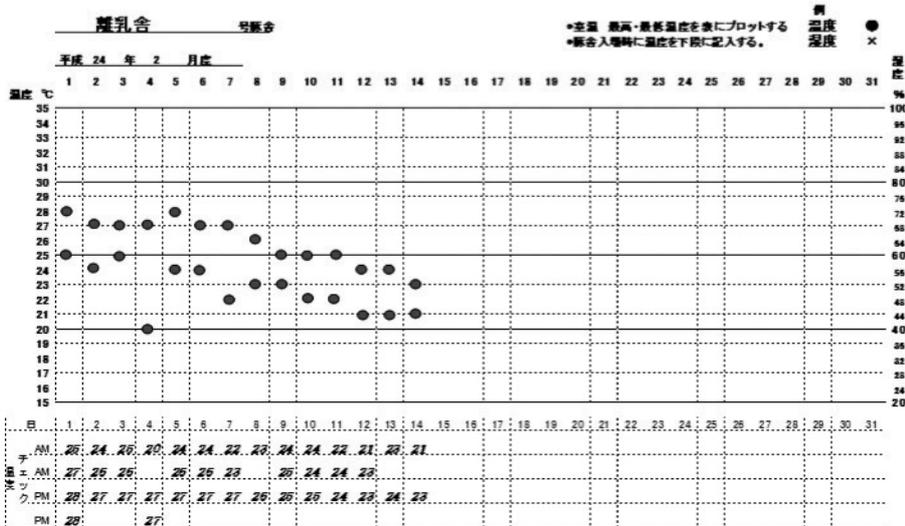
A：

温度計や湿度計を豚舎の環境管理の目安として利用することは非常に良いことです。

ただし、豚を快適な状態にしてあげることが一番大切であることをお忘れなく。人間の体感温度はいい加減なものです。例えば、出荷など体を動かした後だと暑く感じますし、休憩した後だと寒く感じます。温度計を見ることで自分の体感温度と実際の温度とを比較・修正することが重要です。

豚舎に入ったときに温度計を確認し、毎日の最高・最低温度を視覚的に記録しておく、何か豚に異常があった場合の参考になります。冬場の太平洋側の地域では、舎内の乾燥が呼吸器病の発生につながります。湿度調整の目安に湿度計が活躍します。最高・最低温度計、デジタル式・温度湿度計などが一般的に使われていますが、大量のデータを保存、計測できる「おんどとり」のような製品も便利なアイテムです。最近では、インターネットを介して、舎内の監視・制御ができる豚舎も実現されてきています。

## 温度チェック表



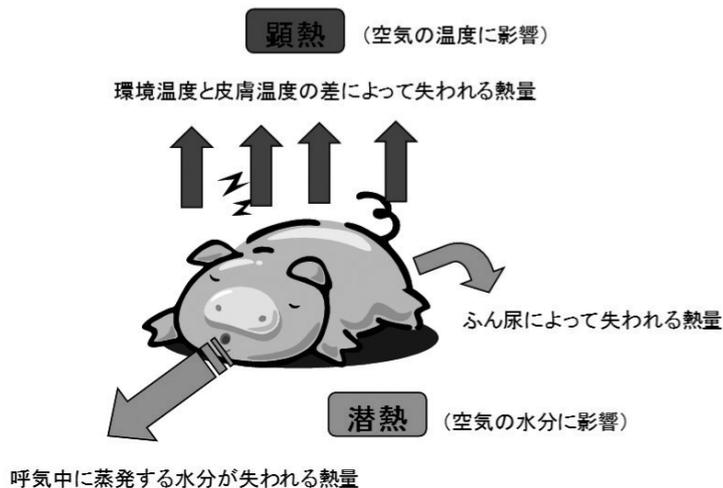
このように最高・最低温度をグラフにプロットすることで温度の動きが視覚的に分かります

## < 敷料などの工夫で、子豚を温めることはできますか？ >

筆者の経験ですが、オガ屑豚舎で離乳直後の子豚を飼ったことがありました。その豚舎には電気もガスもなく、あるものは発酵した熱の出ているオガ屑のみでした。そのため、子豚の寝床部分を保温箱のように囲い、寝場所を確保して急場をしのいだことがありました。

コンクリート床では体感温度が 5°C 下がると言われています。実際に冷たいコンクリートは体温を奪ってしまいます。そのようなときにオガ屑やわら、環境資材を敷いてあげるだけで子豚からの顕熱の損失を減らすことができます。

### 豚の熱損失



顕熱の損失を減少させるためにも敷料は有効な保温対策になります

## <哺乳子豚について>

Q：分娩豚舎では子豚と母豚のどちらに環境温度を合わせるべきでしょうか。

A：

母豚と哺乳子豚の快適環境は違います。分娩豚舎は基本的に母豚の快適環境に合わせ、子豚は保温箱などを使って快適環境をつくるのが理想です。

また、母豚の周りで子豚が寝てしまい、体が冷えて体調を崩し下痢をしたり、衰弱して死亡することがありますので、子豚に寝場所をしつける（保温箱で寝させる）ことも大切なことです。

具体的には、子豚の寝るスペースにはマットなどを置き下からの風を防ぎます。熱源のある保温マットであれば最高です。

上からや横からの風よけ板を取り付けます。子豚が重なり合って寒いようであれば、コルツヒーターなどを追加します。温度だけに左右されず、必ず子豚たちの寝姿を確認してください。重なり合って寝ているようではダメです。



**狭い分娩柵でも工夫次第で保温箱を設置できます**

Q：新生子豚の冷え対策として分娩時にすべきことはありますか？

分娩介護は施設などにより差がありますが、分娩時の死産率や育成率によっては成績改善の効果につながります。分娩時に介護できることにより死産を減らしたり、お産後すぐに羊水をふき取ることによって子豚の消耗が少なくなり、初乳が十分に飲めるようになります。こうしたことからその後の育成率に大きく影響した事例も多く、以前は分娩豚舎に仮眠所などを設け夜間も分娩介護を行いました。

現在の労働生産環境では十分な分娩時の環境をつくることができ、一般的には夜間の分娩介護は少なくなっています。しかし、分娩直後の冷えによる体力の消耗が初乳の吸乳不足や、それに伴う早期の事故につながります。新生子豚を冷えから守るためには分娩時の保温ランプの点灯やスノコの上に板などをひき、その上にオガ屑や環境資材を撒布しておき、ぬれた子豚を早く乾かすことが重要です。



**母豚の尻側にゴムマット、オガ屑、ヒーターを置き、分娩の準備が整った状態**